

学力検査問題「国語」(その一)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

縄文杉は、正直にいうと、ひどくショッキングな姿をしていた。⁽¹⁾これが杉かと疑うような、不格好だった。根から十八、九米^{*}くらいのところ迄の幹が、横にどでかく太く、そこから数本の枝がわかれ、幹の太さは急に減る。枝振りもよくない。杉は丈高くまっすぐで、頂きの尖った三角形、という姿が常識であり、端正というイメージである。この通念は縄文の前では、形なしである。太さと高さの比例も美しいとはいいかねるし、三角も崩れているし、およそ端正とは遠い。根まわり二十八米、胸高直径五米、樹高三十米、コンピューターの計算では、樹齢七千二百年という。発見は意外にも、昭和四十一年。この狭い島だというのに、こんな巨木が長の年月、人目にふれることなくいたというのは、不思議だ。

屋久杉は総じて、こぶこぶ、でこぼこのようだが、この木はまた特にそれがひどく、幹全体が瘤の大波小波で埋めつくされている。その幹が上のほうまで枝がないので、むきだしのまる見えなのだし、しかも周囲二十八米の太さだから、目に来るこぶこぶの面積はひろい。その上にもう一つ、瘤をどぎつく見せるのは、肌の色なのだ。杉の樹皮はもともと赤褐色だが、これにはところどころ灰白色の部分がある。⁽²⁾曝れてなか、白髪のようなわけなのか、赤褐色のなかに灰白色の筋がうねっているのは、おどろおどろしくて不快だった。根は広い範囲にわたって地上を這い、⁽³⁾細横あやにかけてのた打っている。これも曝れてか、踏まれてか、皮がむけて白く裸になった部分が目立つ。なにより不気味なのは、ひと目みれば忽ちわかる、古さである。機械が算出した七千二百年の信、不信はどうともあれ、見た瞬間にすぐもう、直感的にこれははかり知られぬ長生きだ、と肯^{うべ}わされてしまうのだから、なにかは知らずあやしい。岩石などなら、七千年でも抵抗はない。が、生物でそんな長寿が信じられるだろうか。それなのに、⁽⁴⁾見ればその常識をこえた長寿のみこむ。⁽⁵⁾樹容も異様でショッキングだし、樹齢もまた不気味な迫力でせまる。

本当のところを打明ければ、私はおびえていた。おびえているから考えることもなみを外れるし、並外れを考えるから、またそれにおびえる。この杉は、なにか我々のいまだ知らぬものに、移行しつつあるのではなからうか、などと平常を外れたことを思ったりして、だいぶイカレていたのだが、同行皆さんの厚い好意の手前、感じたままのあしざまはいえない遠慮があり、その遠慮でイカレをかくした。昼のお弁当が配られたが、胃^いはしかんでいた。手足も限度だったのは、背中に陽があたっていて温く、⁽⁶⁾暫^{しばらく}時の居眠りをするにはもってこいだった。眠ろうと思えば何処でも眠れるのは、私の得意わざである。

いくらか元氣回復して眺めれば、さつきとは大分にちがってみえた。縄文はやはり、申分のない別格だった。太くずんぐりした姿には、⁽⁷⁾悠揚^{ゆうよう}の雰囲気があり、太さに較べて丈が足りないのは、いつも梢に荒い風が吹き当てているからで、いうならば **A** の姿だろうか。端正ではないが、⁽⁸⁾ゴウケンである。 **B** とみえた幹の瘤も、浮き出た根張りも力であり、強さであり、華奢な美はない代り、実力のたのもしさを見る。樹皮の色がおどろおどろしく思えたのも、改めて見てみれば、手織の織物のようで好ましい。杉皮はやや不規則な畝^{うね}を刻んでいるものだが、その畝に褐色と灰色の二色が施されていれば、いわば縦しぼ織の、⁽⁹⁾乱立^{らんたつ}縞かやたら縞という趣きである。この老巨杉は、姿は **C** なのに、ずいぶん **D** な着物を着ているものだ、と興ふかく思う。⁽¹⁰⁾からだが疲れていれば、心も疲れ、心が疲れていれば、目も誤ってしまう。逢いがたい杉に逢いながら、一度はいとわしく見、二度目に好ましく見直すことを得て、ほっとした。縄文はやはり一位も一位、ずば抜けた風格である。ただし、⁽¹¹⁾風趣^{ふうしゆ}風韻^{ふういん}では、大王杉と呼ばれるものに⁽¹²⁾ユズ^{ユズ}る、と私は思う。

帰路はもうほとんど歩けなかった。右の足を踏みおろせば、うしろに残った左の足が、手をかけて引つ張っても、いかな^{*}こと動こうとしないので驚いた。来年はもうダメだが、今年ならまだなんとか、と思っていたのは、いい気なもので、介添さんの手と背があったからこそ、あぶなあぶなでやっと逢えた屋久の杉だった。逢えたというが、逢ったというのではなく、ただ、表面の形をみた、というだけである。それもはつきりではない。根まわり二十八米、胸高直径五米といっても、その太さ大きさは私には掴めていない。帰京して紐でもつないで計ってみなければ、どうにもわからない。でもそれはまだ何とかなるうが、問題は、あの巨杉をどう考えたらいいか、ということだった。

(幸田文、文藝春秋『精選女性随筆集 幸田文』「杉」より)

※ 米 メートル 曝れて 曝されて いかなこと どうしても

※※ 胃はしかんでいた。 胃が食事を受け付ける状態ではなかった。

学力検査問題「国語」(その二)

(2025 一般Ⅲ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字に直し、漢字は読みがなを記せ。

問二 傍線部 a 「暫時」の意味として最も適当なものを、ア～エから選び、記号で答えよ。

ア 午後 イ 少しの間 ウ 緊急時 エ 休憩

問三 傍線部 (1) 「これが杉かと疑う」とあるが、筆者は杉をどのようなものと認識しているのか。文中から漢字二字で抜き出せ。

問四 傍線部 (2) 「見ればその常識をこえた長寿をのみこむ」とは、どういう意味か。同じことをわかりやすく表現している箇所を、四十字以内で抜き出し、最初と最後の三文字を記せ。

問五 傍線部 (3) 「樹容も異様でショッキングだ」とあるが、その「樹容」(樹の姿)を三つに分けて、それぞれ二十五字以内でまとめよ。

問六 空欄 A～Dに入る適語を、ア～キから選び、記号で答えよ。

ア 醜怪 イ 自然 ウ 粋 エ 無骨 オ 斬新 カ 忍耐 キ 巨大

問七 傍線部 (4) 「からだが疲れていれば、心も疲れ、心が疲れていれば、目も誤ってしまう」とあるが、その心中の思いが記されている箇所を四十文字以内で抜き出し、最初と最後の三文字を記せ。

学力検査問題「国語」(その三)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章を読んで、問一～問八に答えよ。なお、文中の〔1〕～〔22〕は段落番号である。

見上げると、見渡す限りの青空に突然現れたケシ粒ほどの黒い影が、矢のようにこちらに向かった、と、みるみるあしなが蜂が姿を現わしました。あしなが蜂はきやべつ畑の上でいきなり高度を下げると、ゆっくりときやべつの上を旋回しはじめました。もんしろ蝶の幼虫狩りにやってきたのです。〔1〕

何匹ものあしなが蜂が、晩春の陽光にきらめきながらぐるぐるときやべつの上を旋回するさまは、獲物を狙って、^①執拗に低空飛行をくりかえす偵察機そのまま、これから始まる青むし狩りに^②胸をときめかせるに十分な迫力がありました。〔2〕

このあしなが蜂は、「せぐろあしなが蜂」と呼ばれて、体長二十～二十六ミリ、お腹の模様が黒とオレンジ色の横縞模様をした蜂で、もんしろ蝶の幼虫である青むしなどを常食にする蜂です。〔3〕

いま、このきやべつ畑にやってきた蜂は、創設女王と呼ばれる女王蜂です。昨年の秋に交尾を終わると、お腹に卵をかかえて木のうろや石垣などの間で越冬し、春になった今、農家の軒下などに巣を作って卵を生み、生まれてきた幼虫を育てている今年の母蜂です。〔4〕

さて女王は、これと狙いを定めたきやべつの上にそつと降り立つと、青むしに喰いあらされたきやべつの穴から穴を、せわしなくぐりまわり、夢中で青むしを探しはじめました。〔5〕

女王は、一齢[※]や二齢の幼虫には見向きもしません。三齢以上の大ぶりの幼虫を狙っているようです。〔6〕

すでに刈り倒されて束にされ、畦^{あぜ}に横たわる菜種の間を執拗に調べまわる女王もいますが、これは、終齢を迎えた青むしが、さなぎになる場所を探してさまよい、しばしばきやべつ畑を離れる習性を^③ジューク^④チ^⑤しての行動とされます。〔7〕

さて、きやべつ畑で獲物を探す女王は、これぞと思う青むしを見つけるやいなや、^⑥「ア^⑦飛びかかり、大顎で青むしの背中上部に鋭い一撃を浴びせます。^⑧I^⑨をのむ精悍な攻撃の一瞬です。〔8〕

女王は、ぐったりとなった獲物にまたがると、落ち着いた動作で、大顎を使って背中肉を切りさき、噛みとります。そして自分の頭の二倍から五倍もあろうかと思う肉の塊を前脚二本を使ってくるくと器用に廻し廻し、^⑩マンペンなく噛みに噛んで、青緑色の、なめらかな求肥^{きゅうひ}そ

つくりのまるい青むしの肉団子を作りあげます。〔9〕

触角で器用に調子をとりとり、真剣に獲物を料理する様には^⑪少しの残酷^⑫ありません。〔10〕

生きることにのみ専心する生きものたちに特有のひたむきな行動が、見る者に深い説得力と感動を伝えます。〔11〕

女王が、如何に^⑬この作業^⑭に没頭しているかは、私が彼女に近々と顔を近づけても、平然としてその作業を続けていますし、彼女から十センチの至近距離でカメラのシャッターを切りつづけても、シャッターの音などまるで耳に入らないかのようにびくりともしません。ふだんは、ほんのかすかな物音にもパツとふりむきざま、^⑮「イ^⑯V字型に羽をたて、いまにも飛びかからんばかりにイカクする彼女からは、想像しにくい獲物狩りへの心の奪われ方です。〔12〕

この獲物狩りに女王は毒針を使いません。最初の一撃から肉団子を作りあげる迄、女王が使うのはその鋭い大顎と、二本の前脚だけです。〔13〕

女王はまた、肉団子の料理に唾液は混ぜないようです。何故なら蜂の唾液は真つ黒なのに、青むしをどんなに噛みこんでも、独特のつややかな青緑の色を保っていることでわかります。〔14〕

やがて狩りを終わった女王は、まんまるに作りあげた青むしの肉団子をしっかりと胸にだき込み、きやべつ畑を離れると一気に高度をあげ、^⑰「ウ^⑱いう間に青空に吸い込まれてしまうのです。〔15〕

女王は一体どこに消えるのだろうか、女王はその巣をどこに構えているのだろうか。せぐろあしなが蜂は、主に人家の軒下やその近くに巣を作って、人間になじんで暮らすという、ただそれだけの知識と経験を頼りに、私は毎日、写生で通いなれた洛北あたりの農家の軒下などを探しまわりました。〔16〕

その日、比叡山の麓近くの田舎道を歩いていた私は、ふと、田舎道に背を向けて建つ、一軒のとたんの波板張りの納屋が目に残りました。納屋の入り口に回りこんでみると、まわりに人影はなく、巾一間近くもあろうかと思われる同じとたん張りの引き戸が半びらきになっていました。〔17〕

中をのぞくと、うす暗い納屋の中には、田植え用のトラクター、いく種類もの化学肥料の大袋、^⑳鍬^{くわ}、すき、シャベル、稲縄、などなど、あらゆる農具が雑然と納められていました。〔18〕

再びうす暗い納屋の中をのぞいて、何気なく天井を見上げた私は^㉑I^㉒をのみました。なんと、うす暗い天井や梁^{はり}には、ざっと数えただけでも六十は下るまいと思われる、大小のせぐろあしなが蜂の巣がぶら下がっていたのです。〔19〕

作られたばかりの新しい巣と、乾ききってボロボロに破れた古巣が入り混じって、まさにこの納屋は、「あしなが蜂の団地」とでもいいたい

学力検査問題「国語」(その四)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

ものでした。納屋の暗さに目が慣れてくると、巢の上で動いたりうずくまったりしている蜂も見えてきて、これは今年の女王蜂だと思われるた。〔20〕

納屋の外に長くせり出した軒を見上げた私は更に驚きました。明るい日差しを受けて、軒裏では何匹もの女王が巢作りの真っ最中であつたのです。〔21〕

ここだ！ 私は観察にはもってこいの、明るい軒裏に巢を構えた蜂たちとおつき合いをすることに決めました。〔22〕

(甲斐信枝、中央公論新社『あしなが蜂と暮らした夏』より)

※ 齢 昆虫の幼虫の発育段階を脱皮を基準に区切った場合の各時期

問一 次のX・Yの段落が、問題文から欠落している。挿入すべき箇所の前段落番号を記せ。

X 納屋の軒下には、地下足袋、ゴム長、鎌の類、柱には手甲から檜笠ひきかさまでがぶら下げられていました。納屋の前の十五〜六坪ほどの敷地にはコンクリートが敷かれており、敷地の端には二台の乗用車がとめられていました。敷地は駐車場として使われていると思われました。

Y かししいざ探してみると、見なれているはずの巢がおいそれと見つかるものでもありませんでした。一日中歩きまわるだけの空しい日が続くばかりでした。

問二 傍線部①〜⑤のカタカナを漢字に直し、漢字は読みがなを記せ。

問三 空欄ア〜ウに入る語句として、最も適当な表現を1〜5から選び、記号で記せ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | かつと | 2 | ぱつと | 3 | そつと | 4 | あつと | 5 | さつと |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問四 空欄Iに入る、漢字一字の語を記せ。

問五 傍線部A「胸をときめかせるに十分な迫力がありました」とあるが、この「私」の印象を効果的に表している十五字以内の表現を抜き出せ。

問六 傍線部B「少しの残酷ありません」とあるが、あえて「残酷」を否定する「私」の心情を四十五字以内で説明せよ。

問七 傍線部C「この作業」とあるが、何のことか。十字以内で記せ。

問八 この文章の特徴を表した、最も適当なものを1〜5から選び、記号で記せ。

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 興味を持った対象は徹底的に追い求め、情熱をこめて表現している。 |
| 2 | 平易表現と敬体を用いて、読者の生物学への抵抗感を抑制している。 |
| 3 | 食うか食われるかという生き物の非情な世界を冷静に表現している。 |
| 4 | 生あるものの営みを、温かいまなざしをもって精緻に表現している。 |
| 5 | 小さな生き物の生態を通して、生命の不思議に迫る観察をしている。 |

学力検査問題「国語」(その五)

(2025 一般Ⅲ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3

次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

歌川広重の版面は叙情的であるとともに、風景の中の自然を極めて科学的にトラ^①えているようにみえます。それは写実的ということではなく、むしろその本質を強調した描写になっているという意味です。科学というのは自然界の事象をすべて等価にトラえるのではなく、それらのなかから本質を抽出するものです。^①その点で広重の画は科学的なのです。

広重はたくさん作品を残していますが、それらの中には雨や雪を描いたものがたくさんあります。

中でも「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」は最も有名な作品の一つです。これは隅田川にかかる大橋に夏の夕立が降りかかる風景を描いたもので、激しい雨が降るなか、人々が急いで橋を渡っています。広重はここで雨を線で描いている点がおもしろい。自然に対して鋭い観察力を持っていた広重ですので、雨は粒であることは知っていたはずですが、しかし広重は、他の多くの作品でも雨を線として描いています。一方で、

雪はどの作品でも点で表現しています。たとえば④「木曾海道六拾九次之内 大井」では、雪を大粒の点として描きました。

雨は大きな速度で落下するので線として表現し、雪はゆっくり落下するので点として表現したのでしょう。これもまた雨と雪の本質を表現しているといえます。

人が目でものを見るとときには残像が生じます。たとえばテレビ放送などは1秒に30フレームの画像を次々と映し出すので、残像効果で物が動いているように感じます。それと同じように、落下する雨は残像によって線に見えるのです。

雨の夜、車のヘッドライトの前を落ちる雨を見てください。すると確かに雨は線に見えるはずです。雪の場合は、ゆっくり落ちるので、残像が消える頃でもあまり位置が変わらず、粒として見えます。

「大はしあたけの夕立」では、黒い線で強い大粒の雨を表現しています。さらに細い線と太い線の交錯と途切れが、夏の夕立のダイナミックな雨の降り方を想像させます。それは雨に煙って対岸がかすんで見えるほどの強さなのです。

この画のもう一つのおもしろい点は雲です。画の上部にぼかしとして入っているだけなので、あまり注目されませんが、よく見ると黒いばかりから、ところどころ刷毛でハ^②いたように黒い雲が下に伸びていて、そこから強い雨の線が放たれています。この黒い雲の垂れ下がりは、実際

に強い雨が雲を引きずり下ろすことで起こります。広重は経験的に、強い雨のときは雲が垂れ下がることを知っていたのかもしれませんが。

ただ、同じ「大はしあたけの夕立」でも、黒雲の垂れ下がりがはつきりしているものとそうでないものがあるようで、そこが印刷ではなく、彫師が彫った版木を使い、高い技術を持つ摺師が手作業で一つ一つ刷った版面であることの味といえます。

^③広重は線の使い方によって様々なタイプの雨を描いています。⑥「東海道五拾三次之内 土山 春之雨」でも、交錯する線によって、強い雨

を表しています。これに対して同じく⑥「庄野 白雨」では、オオアワ^④でにわか雨から逃げる旅人らしき人たちが描かれていますが、雨の線はほとんど平行で交差していません。陰影の濃淡で描かれた竹やぶの竹のしなりから、風が強いことが窺えます。ここで「白雨」というのは、強い雨を指していて、大粒の雨のしぶきや雨が引きずり下ろした雲で周囲が白く煙るように見える状態を指します。他にも、日の差す明るい空から降るにわか雨を指す場合もありますが、この作品では前者でしょう。

⑩「近江八景之内 唐崎夜雨」は篠突く雨、つまり豪雨を描いていて、「庄野白雨」と同様に雨の線はほとんど平行に描かれています。平行な線の密度に濃淡をつけることで、強い雨を表現していますが、強い雨の場合、同じ雲から降る雨でも一様ではなく、そのなかに強いところと弱いところができます。広重は雨の線の密度でその特徴を表現しているのです。また、豪雨をあえて平行な線で描くことで、夕立よりさらに強い雨の雰囲気を出したかったのかもしれませんが。これも広重の雨の本質を表現する技法ではないでしょうか。

自然を「みる」といったとき、知識を持って心の目で「観る」のと、目に映るものを「見る」ことがあります。「観測」や「観察」という言葉からわかるように、科学者は前者を好みます。しかし自然をみる上でどちらが優れているかは、かならずしも自明^⑤ではないように思います。自然を観る非常に優れた目を持っていた広重は、雨が粒であることを知っていたはずですが、その雨をあえて目で見えるように線で表現したのは、目に映るありのままの方がより自然を表していると考えたからだと思像できます。そして私たちはその雨の描写にリアリティだけでなくそれ以上の叙情を感じるのです。その意味で「見る」ほうが優れているともいえるのです。

(坪木和久、新潮社「波六月号『天気のからくり』」より)

学力検査問題「国語」(その六)

(2025 一般Ⅲ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部④の意味を記せ。

問三 傍線部(1) 「その点で広重の画は科学的なのです」とあるが、「その点」とはどのような点か。十五字以内で記せ。

問四 傍線部(2) 「広重は、他の多くの作品でも雨を線として描いています。一方で、雪はどの作品でも点で表現しています」とあるが、なぜか。それを説明した次の文の空欄に、漢字四字の適語を入れて完成せよ。

雨は I が大きいので、 II が働いて線に見えるが、雪はゆっくり落ちて粒として見えるので点として表現している。

問五 傍線部(3) 「広重は線の使い方によって様々なタイプの雨を描いています」とあるが、それを説明した次の文の空欄 い う には文中の適語を、 あ え お には作品名を入れて完成せよ。ただし、作品名は文中の㉠～㉣の記号を用いること。

「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」は あ とともに線を い させて強い雨を表しているが、さらに強い雨を表現しようとして、 う で描いているのが え や お である。

1

問一	問三	問五						問六	問七
①	端	①	崩	②	る	③	て	A	こ
じゅうおう	正	樹	れ	幹	°	全	い	カ	の
	問四	高	て	全		体	る		杉
		に	い	体		が	°	B	ゝ
②	見	対	る	が		赤		ア	ろ
ゆうよう	た	し	°	瘤		褐			う
	瞬	て		で		色		C	か
	ゝ	幹		覆		の		エ	
③	が	が		わ		樹			
剛健	し	太		れ		皮		D	
	ま	す		、		に		ウ	
	う	ぎ		根		灰			
④		、		は		白			
譲		頂		地		色			
		き		上		の			
		の		を		筋			
問二		三		這		が			
		角		っ		う			
		形		て		ね			
イ		が		い		っ			

2

問一	問二	問三	問五	問六			問七
X	①	ア	低	生	奪	は	青
〔18〕	しつよう	2	空	き	う	な	む
			飛	も	行	い	し
			行	の	為	°	の
Y	②	5	を	が	に		肉
〔16〕	熟知	ウ	く	生	は		団
			り	き	残		子
		4	か	る	酷		作
	③	問四	え	た	と		り
	せいかん	息	す	め	い		
			偵	に	う		問八
			察	他	感		
④			機	の	情		
満(万)遍				生	の		
				き	入		
				も	り		
⑤				の	込		
威嚇				の	む		
				命	余		
				を	地		

3

問一	問三	問四	問五
①	自	I	あ
掟	然	落	㊦
	の	下	
	本	速	
②	質	度	い
掃	を	Ⅱ	交錯
	強	残	
	調	像	
③	し	効	う
大慌	て	果	平行な線
	い		
	る		
問二	点		え
わかりきっていること	°		㊧
			お
			㊨

※ え、お は順不同